様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　７ 月　１ 日現在

機関番号：３２５１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０２６３８

研究課題名（和文）幼小接続期の音楽教育を担う教師養成プログラムの国際比較研究

研究課題名（英文）An international comparative study of teacher training programs responsible for music education during the childhood connection period

研究代表者
尾見　敦子（Omi, Atsuko）

川村学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：２０１８５６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：エストニアでは修士課程で教育科学・心理学と乳幼児から各段階の発達と教授法・教育実践を豊富に学んだ音楽の専門家が音楽教師となり、乳幼児から中等学校まで教える。５年間（３年制の学士課程と2年制の修士課程）を通じた音楽専門領域と教授法の充実ぶりが単位互換制度に基づく欧州高等教育圏内で際立っている。
　ハンガリー、フィンランド、エストニアの音楽教育の専門家による幼児の音楽指導には、共通する特徴がみられた。すなわち、子どもの声域に合った教材選択、明瞭な音楽形式、歌唱と動きの結合、変化に富む進行等、子どもの興味・集中力・能動性を引き出す巧みな構成である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　海外の音楽教育の専門家による音楽指導は、子どもの発達に応じて、緩急自在に、歌・身体表現・楽器・鑑賞が切れ目なく構成され、教師の歌唱・ピアノ・リズム楽器・音源・創作教具・お話や描画の活用他、子どもの五感に働きかける様々なスキルと創意工夫が随所に現れていた。このことから音楽指導のありかた次第で、子どもたちの能動性・音楽性・人格の発達の諸側面の成長を促すことができるといえる。ハンガリーとエストニアの幼児教育のナショナルカリキュラムは、音楽活動の種々の表現形式の学習によってもたらされる「創造的な自己表現」を目指している。「自分なりに表現して楽しむ」（領域「表現」）からの発想の転換が示唆される。

研究成果の概要（英文）：In Estonia, music specialists who have learned abundantly in educational science, educational psychology, the development of each stage from infants to high school students, teaching methods, and educational practices in the master's course become music teachers and teach from infants to secondary schools. Throughout the five years (three-year bachelor's degree and two-year master's degree), the enhancement of specialized area of music and teaching methods stand out in the European higher education area based on ECTS, European Credit Transfer System.
　The following common characteristics were found in the music teaching of young children by Hungarian, Finnish and Estonian experts. They select songs suitable for children's vocal range, with simple musical forms. They link singing to moving. The progress of their lessons are varied. They cleverly construct their lessons to draw the child's interest, concentration and activity.

研究分野：音楽教育学

キーワード：幼小接続期　音楽教育　教師養成　国際比較

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　前回の共同研究「音楽の協同性に着目した幼小接続の音楽活動プログラムの実証的研究」（平成 26 年度～平成 28 年度 科学研究費助成事業、基盤研究（C））では、ハンガリー、フィンランド、ドイツの「幼小接続期」の音楽教育事例を収集し比較検討した。ハンガリーには音楽が包括的な人格形成に寄与するというコダーイの理念とそれに基づく教授法が受け継がれており、フィンランドとドイツの音楽学校の指導者たちは、音楽の持つ総合的な教育力を地域社会の子どもたちに広く積極的に及ぼす教育活動を推進していた。諸外国の状況は異なっているが、「幼小接続期」の積極的な音楽教育の意義が共有されていた。

(2)　日本の幼稚園教育要領の教育内容の柱立ては、諸学問・芸術分野からではなく、「幼児の生活する姿」を基にした「領域」で編成されており、それは 30 年以上続いている。このことが音楽の持つ総合的な教育力への着目を妨げているのだろうか。「領域」編成は日本的な特質なのか。諸外国では就学前のナショナルカリキュラムにおいて音楽はどう扱われているのだろうか。幼小接続期の音楽教育はどのような養成課程を修了した教師が担っているのだろうか。これらが今回の研究の背景・動機となっている。

２．研究の目的

本研究の目的は、諸外国における「幼小接続期の音楽教育を担う教師の養成プログラム」の比較検討を行い、幼小接続期の普遍的な音楽教育の理念・教育内容・方法についての我が国への示唆を得ることである。前回の「音楽の協同性に着目した幼小接続の音楽活動プログラムの実証的研究」では学習者に、今回は教員養成に焦点を当て、一対の体を成す研究を目指す。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、諸外国における「幼小接続期の音楽教育を担う教師の養成プログラム」の比較検討を行う。調査対象はハンガリー、フィンランド、エストニアである。3 か国の教師養成のプログラムを、ナショナルカリキュラム、教師養成校のカリキュラムの全体像、教師養成の授業観察の視点から比較・分析する。教師養成の授業は、ミュージシャンシップ（音楽性）の育成、発達の理解、教材と教授法の観点から比較・分析する。以上をもとに総合的な考察を行う。

４．研究成果

(1) ３年間の概要は以下のとおりである。

初年度（平成 30 年度）は、幼小接続期の音楽教育を担う教師養成のカリキュラムの調査と教師養成の授業と幼小接続の音楽指導の参観を行った。尾見と蓮見は、エストニアの首都タリンにある国立音楽アカデミーを訪問して、音楽教員養成課程のカリキュラムの調査、さまざまな授業の参観および担当教員への事後のインタビューを行った。音楽教育専攻は合唱とジャズの 2 分野から成るが、カリキュラムは連携し、クラシック音楽もポピュラー音楽も学ぶ。コダーイやオルフの教授法、民族楽器のカンテレ演奏法等、幅広い学修が特徴的である。音楽教育専攻の学生はジャズの授業で複数の楽器の演奏法を習得し、ピアノ専攻の学生が、声で即興表現の授業に積極的に参加し、音楽専攻の学生に求められる音楽経験の幅がかなり広い。（小学校の休暇期間に重なったため、音楽の多岐にわたる専門性、子どもの発達の理解、教育実習を学んで教員養成課程を修了した教師たちが小学校でどのような授業を行っているかについての調査を次年度の 3 月に計画したが、コロナ禍で実施することができなかった。）エストニア音楽アカデミーの教授は幼稚園の音楽指導を定期的に行っており、それを参観することができた。

フィンランドでは、ユバスキュラ応用科学大学を訪問し、この国の特色ともいえる幼児音楽教育者養成課程についての調査、音楽教育主任教員の授業の参観と事後のインタビューを行った。ヘルシンキ市の就学前の音楽教育機関で、熟達した教師による幼児の音楽指導を参観し、音楽教育の専門家による幼児の音楽教育の実践とその背後にある教育の原則を調査した。（なお、ここで出会った熟達した教師たちを輩出している幼児の音楽教育の専門家養成の実地調査を次年度に行うことを計画していたが、コロナ禍で実施することができなかった。）

フィンランドで 40 年の歴史を持つ子どもの弦楽器教育の体系であるカラー・ストリングスによる子どもたちの演奏の鑑賞、創始者へのインタビュー、普及活動の調査、資料の収集を行った。

小川は、ベトナム政府教育訓練省の外国人コンサルタントとして初等中等教育における音楽科学習指導要領の作成、国立ハノイ教育大学における器楽教育指導 コースのカリキュラム編成と指導、東南アジアにおける器楽教育の普及に関する調査研究「器楽教育を実施可能な教員養成のスキーム構築」に従事しながら、グ ローバルな視点からの初等教育教員養成の研究を進めた。

二年次（令和元年度）は、前年度にフィンランドとエストニアを訪問して収集した資料の整理を行い、尾見は、特色ある事例として、フィンランドの専門家による子どもの音楽指導の２つの

事例に着目し、研究発表を行った。一つは、40 年以上の歴史を持つコダーイの教育法に基づく子どものヴァイオリン教授法である Colourstrings、および、教師がオンラインでこのメソッドを学べる International Minifiddlers、もう一つは、ヘルシンキ音楽学校の music play school における乳児から幼児のための音楽遊びの指導である。

また、尾見は日本の伝統音楽の学習法である唱歌が、広義のソルフェージュとして普遍的な価値を持つことを、国際学会においてワークショップ形式で発表した。国内学会では、子どもの自律的な音楽活動において読譜が果たす役割について発表した。

小川は、音楽教育のカリキュラムの国際比較、及び移動ド唱法についてのアジアを中心とする国際比較を中心に行なった。9 月に開催された ISME Legacy Conference では、招待講演として発表し、政治制度やカリキュラムの国による違いを超えて普遍的な理念を追求した。また 7 月から 10 月にかけて行なった一連 の発表では、移動ド唱法の各国の実践状況を把握するとともにそれぞれが抱える問題点について論じた。

蓮見は、今日、わが国では乳幼児保育の需要が増し、保育の現場が逼迫している状況を明らかにするために、保育士等を対象に困り感についての自由記述式のアンケートと、保育士等 200 名と 1～5 歳までの乳幼児を持つ母親 410 名を対象とする、全国規模の WEB 調査を行った。そして、母親、保育士等に育児・保育における 困り感と保育現場での音楽の活用に関する調査結果と合わせて報告書にまとめた。年度末には、小学生の音楽関係の習い事や音楽科の教科書の家庭での活用に関する WEB 調査を行った。

最終年度（令和 2 年度）はコロナ禍のため、海外調査に代えてハンガリー、オーストラリア、イギリスのオンライン講座の受講を通して海外事情を研究取材する一方、「歌わない音楽教育」の代替ではなく本質的な意味で音楽の理解をもたらす、就学前・小学校教員養成の読譜のエクササイズ、わらべうたの教材・教授法などを創出した。3 年間の研究成果報告書（295 頁、資料１）を制作し、国内の研究者等と研究成果の共有を図った。

資料１．研究成果報告書（全 295 頁、令和 3 年 3 月）の構成

はじめに

研究組織

研究の概要

１節　論文等（10 件）

２節　口頭発表（12 件）

３節　教員養成の授業実践―幼小接続期の音楽教育を担う教員養成の視点から（抄）

・読譜のエクササイズ（尾見敦子）

・保育者のミュージシャンシップの育成に向けた教材・教授法の開発（尾見敦子）

・幼小接続の音楽教育を担う教員養成におけるわらべうたの教材・教授法研究
―就学前教育編―（榎田光代・尾見敦子）

・幼小接続の音楽教育を担う教員養成におけるわらべうたの教材・教授法研究
―小学校教育編―（山本弘子・尾見敦子）

４節　学校種を越えた実践研究教員養成の授業実践―就学前と義務教育、学校教育と教員養成、日本と海外を繋ぐ視点から（抄）

３）コダーイ学校音楽教育研究会オンライン例会 2020（抄）

・小学校の授業実践（藤山和可）

・中学校の授業実践（鈴木太一、清水直子）

・大学の教育実践（木下千代）

・海外のセミナー（尾見敦子）

(2) 海外の「音楽教育の専門家」による乳幼児の子どもの音楽指導事例の分析を通して、日本の就学前音楽教育の意義、乳幼児の望ましい音楽指導のありかた、保育者養成の音楽教育の力点の置き方について再考する視点を得られた。2 つの研究発表の要約を以下に示す。

①フィンランドの公教育制度と音楽学校における乳幼児の音楽教育（尾見：2019）

ヨーロッパでは伝統的に、公教育の外に、課外で児童・生徒が音楽を学べる「音楽学校」が地

域に整備されており、子どもが放課後に地域で音楽を学ぶことができる。そして音楽学校の教師になるための教育課程が定められている。フィンランドの音楽学校（Musiikkiopisto）に特徴的なことは、乳幼児（0～6 歳児）部門を有していることである（Musiikkileikkikoulu、直訳すると「音楽遊び学校」、英語表記は music play school）。音楽学校の乳幼児部門（music play school）の教員養成は、1987-88 年に、ユヴァスキュラ、ヘルシンキ、ラハティのポリテクニック（職業大学）で開始された（現在は、ラハティにはない）。ヘルシンキのシベリウス音楽大学にも幼児音楽教育の専門科目が置かれている。（以上は、2019 年 3 月、ヘルシンキ大学の音楽教育担当教授で、music play school の教員養成の創設に関わった Inkeri Ruokonen 氏へのインタビュー調査に基づく。）つまり、フィンランドでは音楽学校の教員養成機関を卒業した専門家による乳幼児の音楽遊びの指導を、地域の音楽学校で享受する機会が低廉な授業料で広く一般に開かれている。

music play school のベテラン教師による音楽指導は、子どもの発達に応じて、緩急自在に、歌・身体表現・楽器・鑑賞が切れ目なく構成されていた。教師の歌唱・ピアノ・リズム楽器・音源・創作教具・お話や描画の活用他、子どもの五感に働きかける様々なスキルと創意工夫が随所に現れており、音楽指導のありかた次第で、子どもたちの能動性・音楽性・人格の発達の諸側面の成長を促すことができることを明らかに示していた。

②エストニアとハンガリーにおける幼児の音楽指導―教員養成大学の音楽教員による指導事例の分析を通して―（尾見 2020）

エストニアとハンガリーの幼児の音楽指導の範例を分析し、音楽指導の構成と教材・教授法の特徴を明らかにする一方、音楽活動の意義や活動の構成の根拠を与える、両国のナショナルカリキュラムを概観した。

エストニア音楽・演劇アカデミーのクリスティ・キール（Kristi Kiiru）の音楽指導は、歌の構成音は 2～5 音、子どもの声域に合った音域、明瞭な音楽形式、歌唱と動きの結合、変化に富む進行等、子どもの興味・集中力・能動性を引き出す巧みな構成である。導入（活動１）は輪になって動物のしぐさと鳴き声で遊ぶ。4 音旋律で音域は D-B の 6 度、形式はＡＢＡＣ、全員唱に続き第 4 フレーズで、順番にソロで動物の鳴き声としぐさを即興する。その後、教師のピアノの近くに一列に座る。活動２は声の遊びである。順次進行の 8 拍の歌を、教師のピアノ伴奏で、C-G と E♭-B♭の音域で歌って、話す声と歌う声の違いを楽しむ。活動３では、全員唱で「お名前は？」と問い、順にソロで答えていく。音域は D-G である。椅子に一列に座った歌唱が続いた後は、再び床に輪になって座り、活動 7 のしぐさ遊びを楽しむ。この歌の音階はド・ペンタトニック（d, r, m, s, l）で、d＝G、音域は D-B である。活動８の導入は、手で持ったマレットを歌に合わせて器用に上下に動かす遊びをする。最後は立って、歌いながら全身を使った時計の振り子のしぐさ遊びをする。1 拍 1 動作の短い歌で、「m, s, l」の 3 音、E～A の 4 度の音域である。クールダウンして一人ずつ出席取りの歌を下行の短 3 度（音楽的母語で基本音程）で歌って自然解散する。

ハンガリーの幼稚園の主たる教材は、「言葉と音楽と動きが一体」となった伝承の歌遊びと伝承の唱え歌である。ルールのある遊びを、無伴奏で聴き合って歌い遊ぶ体験を通して「人間関係」が育つ。韻律のある歌詞を繰り返し歌うと音楽の拍・リズム・音程感覚・形式感が育つ。ディートリヒ・ヘルガ Dietrich Helga（ハンガリー、元 ELTE 大学小学校・幼稚園教員養成学部）による 30 分間の活動は、挨拶のエコーで始まり、５つの伝承遊びの間に、「秋の野原」から単語を連想し、一人ずつ拍に乗せて即興的に唱える活動と、「海の生き物」（絵本）を見て、情景を拍に乗せて８拍の文章を創って表現する活動を挟んでいた。これらの「即興的創作」は音楽の拍・リズム・フレーズの感覚を育てる音楽教育と同時に言語教育である。

ハンガリーの幼稚園のナショナルカリキュラムは、幼稚園教育の基本課題である「母語と思考力、健康、感情、道徳、共同体の教育」を実現する５つの活動形態の一つに「歌・楽器・歌遊び・子どものダンス」を明確に位置づけている。エストニアの就学前教育のナショナルカリキュラム（資料 2）は、「音楽」を「美術」「身体の動き」等と並んで「学習と教育の 7 つの分野」に位置付けている。「歌い、動き、踊り、楽器で演奏することにより、創造的に自分自身を表現することができる」ことを教育の目的と定めている。両国とも、幼児にとって音楽と動きが密接な関係あることをふまえ、音楽活動の種々の表現形式の学習によってもたらされる「創造的な自己表現」を目指している。我が国の「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」（領域「表現」）という考え方はこれとは向きが逆である。積極的な音楽教育を遠ざけていると言える。

資料２．エストニアの就学前教育のナショナルカリキュラム（2008）

§16.就学前の保育施設は、子どもたちの一般的なスキル(個人的、社会的、遊び、学習スキル)の開発、学習と教育の７つの分野における全体的な発達を支援しています。
私と環境／言語とスピーチ／第二言語としてのエストニア語／数学／美術／音楽 ／身体の動き

§22.音楽の教科領域
(1) 学校教育と教育の目的は、子どもが次のことを行うことです。
1) 歌ったり音楽を演奏したりすることに喜びを感じる。
2) 聴く音楽に集中できる。
3) 歌い、動き、踊り、楽器で演奏することにより、創造的に自分自身を表現することができます。
4) グループで、または自分で音楽を再生することができます。
(2) 音楽の教科領域の内容
1) 歌う
2) 音楽を聴く
3) 音楽的でリズミカルな身体の動き
4) 楽器を演奏する。
(3) 学校教育と教育の計画と組織化について（略）
(4) 学校教育と教育の結果、6～7歳の子どもは、以下のことができるようになっている。
1) 彼または彼女の自然な声で表現力豊かに、自由に呼吸して歌う。
2) 年齢にふさわしい民謡や子ども歌を、グループやバンドで、または一人で、歌う。
3) 歌または音楽を注意深く聴くことができ、聴いた音楽の特徴を述べることができる。
4) 耳で聴いて、歌と器楽を区別できる。
5) 学んだ楽器の音色と音を識別できる。
6) 子どもの年齢に適したリズムとメロディーの楽器で、学んだ歌や器楽の簡単な伴奏を演奏する。
7) 子どもの楽器で演奏し、楽器のバンドで演奏することができる。
8) 音楽の雰囲気に合わせて動く。
9) 音楽的・リズミカルな動きで創造的に表現する。　（訳：尾見敦子）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>尾見敦子 | ４．巻<br>32-1 |
| ２．論文標題<br>日本伝統音楽への興味と理解に及ぼす唱歌（しょうが）の役割ーコロナ禍の大学のオンライン授業を通して | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>川村学園女子大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>97-116 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>蓮見元子・尾見敦子・川嶋健太郎 | ４．巻<br>32-1 |
| ２．論文標題<br>小学生の放課後の活動の学年による変化と保護者のかかわりー音楽活動・習い事を中心に | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>川村学園女子大学研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>77-95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>尾見敦子・枝村美夏 | ４．巻<br>18 |
| ２．論文標題<br>コダーイの教育法における「Musicianship」の理念と実践―保育者・小学校教員養成の授業への応用をめざしてー | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>音楽表現学 | ６．最初と最後の頁<br>104-105 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>尾見敦子 | ４．巻<br>1 |
| ２．論文標題<br>フィンランドにおける専門家による乳幼児の音楽指導 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>全国大学音楽教育学会関東地区学会会報 | ６．最初と最後の頁<br>19-20 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>尾見敦子 | 4．巻<br>17 |
| 2．論文標題<br>コダーイ・メソッドによるヴァイオリン教授法とその指導者養成－フィンランドのColour Strings とMini Fiddlers の現地調査 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>音楽表現学 | 6．最初と最後の頁<br>154 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>蓮見元子・尾見敦子 | 4．巻<br>31-1 |
| 2．論文標題<br>保育・育児における困り感と子どもの音楽的かかわりについて | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>川村学園女子大学研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>75-94 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Ogawa, Masafumi | 4．巻<br>1 |
| 2．論文標題<br>Making Children Happy through Music: A Universal Mission of Music Teachers in the Classroom | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>ISME Legacy Conference 2019 Proceedings & Abstracts Book （電子出版） | 6．最初と最後の頁<br>69-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>尾見敦子・山本幸正・浅田裕 | 4．巻<br>49-2 |
| 2．論文標題<br>楽譜を読める楽しさを子どもたちに与えよう―コダーイ・メソッドを手立て として― | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>音楽教育学 | 6．最初と最後の頁<br>57-58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>小川昌文・尾見敦子・陳暁嫻，　稲木真司、辻康介 | 4．巻<br>49-2 |
| 2．論文標題<br>学校教育の唱法問題　　グローバルな視点から考える | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>音楽教育学 | 6．最初と最後の頁<br>69-70 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>尾見敦子、蓮見元子 | 4．巻<br>3 |
| 2．論文標題<br>エストニアの青少年の歌と踊りの祭典 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>川村学園女子大学　子ども学研究年報 | 6．最初と最後の頁<br>149-165 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>尾見敦子、大屋省子 | 4．巻<br>30-1 |
| 2．論文標題<br>「国際コダーイ・シンポジウム2017カナダ大会」における"Singing the Circle"の理念の展開―コダーイ・コンセプトの現代的意義の視点からー | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>川村学園女子大学研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>157-177 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>尾見敦子・枝村美夏 | 4．巻<br>16 |
| 2．論文標題<br>コダーイの教育法に基づく音楽教師のための研修―オーストラリアのSummer School Music Program からの報告― | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>音楽表現学 | 6．最初と最後の頁<br>95-96 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Atsuko Omi |
| 2．発表標題<br>Workshop: “Shoga”, a learning method of Japanese traditional music: Experiencing the Percussion part of “Edo Matsuribayashi (Festival music)” |
| 3．学会等名<br>24th International Kodaly Symposium 2019（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Masafumi Ogawa, Hong—Ky Cho, Jessie H. S. Chen |
| 2．発表標題<br>Issues of Movable-Do and Fixed-Do Systems at Grade Schools in Taiwan, South Korea, and Japan: Inevitable Commonalities as Far Eastern Countries |
| 3．学会等名<br>24th International Kodaly Symposium 2019（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Masafumi Ogawa, Jessie H. S. Chen, Xue Rong Cui |
| 2．発表標題<br>Issues of Movable-Do and Fixed-Do Systems at Grade Schools in Aisa |
| 3．学会等名<br>12th Asia Pacific Symposium for Music Education Research, (Macau, Macau)（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Masafumi Ogawa |
| 2．発表標題<br>Making Children Happy through Music |
| 3．学会等名<br>ISME International Society for Music Education Legacy Conference as Keynote Speech (Istanbul, Turkey)（国際学会） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>小川昌文 |
| ２．発表標題<br>ベトナム音楽科学習指導要領（第２次）の改訂作業に従事するー日本型教育の海外展開の一事例 |
| ３．学会等名<br>令和元年度　日本教育大学協会研究集会　（岡山大学） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Atsuko Omi, and others |
| ２．発表標題<br>Let’s Sing Along & Play Japanese Traditional Folk Tune and Singing Games |
| ３．学会等名<br>23rd International Kodaly Symposium（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>小川昌文 |
| ２．発表標題<br>世界の音楽教育から我が国の音楽教育を考える―ヨーロッパ、アメリカ、アジアの学校の音楽教育を踏まえて― |
| ３．学会等名<br>全国大学音楽教育学会関東地区学会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>尾見敦子 |
| ２．発表標題<br>ワークショップ　わらべうたの魅力に迫る―元祖「協働的音楽活動」の教育的価値の発見ー |
| ３．学会等名<br>日本民俗音楽学会第8回研究例会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Masafumi Ogawa |
| ２．発表標題<br>Issues of Movable-Do and Fixed-Do Systems at Grade Schools in Asian Countries: a comparison between Japan, South Korea, Vietnam and Indonesia |
| ３．学会等名<br>ISME World Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Masafumi Ogawa, Yuji Otake |
| ２．発表標題<br>Effects of Instrumental Music Education in Public Primary Schools - How are children changed through experiences of instrumental music education in Indonesia |
| ３．学会等名<br>ISME World Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>小川昌文 |
| ２．発表標題<br>インドネシアにおける器楽教育の導入と普及に関する基礎研究ー小学校現地教員による指導の効果の検証ー |
| ３．学会等名<br>日本音楽教育学会（第69 回全国大会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計4件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>（分担執筆）尾見敦子 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>出版社 | ５．総ページ数<br>248 |
| ３．書名<br>音楽教育研究ハンドブック | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>（分担執筆）小川昌文 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>音楽之友社 | 5．総ページ数<br>248 |
| 3．書名<br>音楽教育研究ハンドブック | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>（分担執筆）小川昌文 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>音楽之友社 | 5．総ページ数<br>238 |
| 3．書名<br>最新中等科音楽教育法 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>（分担執筆）尾見敦子 | 4．発行年<br>2019年 |
| 2．出版社<br>音楽之友社 | 5．総ページ数<br>238 |
| 3．書名<br>最新中等科音楽教育法 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 小川　昌文<br>(Ogawa Masafumi)<br>(30177141) | 横浜国立大学・教育学部・教授<br>(12701) | |
| 研究分担者 | 蓮見　元子<br>(Hasumi Motoko)<br>(60156304) | 川村学園女子大学・文学部・教授<br>(32514) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |